

【附属機関名称】 会議概要

会議名	令和元年度 第2回介護予防・日常生活支援総合事業推進部会		
事務局	福祉部地域包括ケア推進課		
開催年月日	令和2年1月30日(木)		
開催時間	午後2時30分～午後4時30分		
開催場所	足立区役所 ギャラクシティ		
出席者	諏訪 徹 委員	太田 重久 委員	倉澤 知子 委員
	中島 毅 委員	中村 輝夫 委員	結城 宣博 委員
	大竹 吉男 委員		
欠席者			
会議次第	別紙のとおり		
資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・【資料1】 前回(第1回)の振り返り</li> <li>・【資料2】 令和二年度一般介護予防教室事業プロポーザル選定委員会結果報告</li> <li>・【資料3】 総合事業の変遷と今後の展望</li> </ul>		

○事務局 予定時刻より早いのですが、皆様、お集まりになられましたので、ただいまから令和元年度第2回足立区地域包括ケアシステム推進会議介護予防・日常生活支援総合事業推進部会を開催させていただきます。

本日は、お忙しい中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。

本日の司会は、地域包括ケア推進課の伝野が担当させていただきます。よろしく願いいたします。

初めに傍聴者の皆様にお願いがございます。会場内でのビデオカメラ、カメラ、携帯電話等のご使用はお控えください。また、会議終了後は名札を事務局にご返却いただきからお帰りください。ご理解とご協力をお願いいたします。

議事に入ります前に、地域包括ケア推進課長の千ヶ崎よりご挨拶いたします。

○千ヶ崎課長 改めまして、皆様、こんにちは。本日はお忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

今年度第2回目のこの部会でございます。前回の振り返りも含めまして、ちょっと私からお話しさせていただきたいと思いますが、この部会については、実は、昨年度1年間は足立区のケアシステムのビジョンをつくるということを主眼に置いていたため、開催されておられませんでした。今年度からまたこの部会が始まりましたというところで、この年、今回でその2回目となります。

この会議は介護予防・日常生活支援総合事業推進部会となっておりますが、これが果たして何のための会議なのだろうかというのが、分かりづらいところではあります。端的に言いますと、やはり元気なうちから、高齢者の方は今本当に元気な方が多いので、そういった方たちにどのように活躍していただく場を設けていくのか、ということは今役所

の中で考えております。例えば働きたい方は就労につながる道筋だとか、ボランティアをしたい方はボランティアにつながるだとか。または、自分の地域で集まって自分たちで何かサークル活動をやりたいだとか、様々なニーズがあると思います。そういった高齢者のニーズをどのように役所として形につくっていくのかということを考えていく部会でございます。その中で、前回の部会で皆様から、通いの場について主に議論いただき、たくさんのご意見をいただきました。ありがとうございました。実は令和2年度から、この後報告等もございますけれども、そういった通いの場に、自分たちで自主的に介護予防というか、いつまでも元気な暮らしを続けられるための取り組みとこのことをやってみよう、という投げかけを、今まで以上にさせていただきたいと考えております。

そういったことでは、その中での様々なニーズを、また現場をよく知る皆様方からご意見を頂戴して、そういったニーズをどうやって我々としては形や方向性を作っていくのかということを考えていますので、本日も忌憚のないご意見をいただければと思います。推進会議の本体ですと、人数が多くてなかなかいろいろな意見が出てこない、発言しにくい雰囲気もあるかと思っています。ぜひ、この部会では、本当に率直なご意見を、活発にご議論いただきたいと思いますので、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

実はこの部会の副部会長でございました太田貞司委員が、ご都合により今回退任することになりました。学校の方でもお忙しいというお話も私もちょっと一度お会いしてを聞いたのですが、皆様方によろしくお伝えくださいということで承りましたので、このことをご報告したいと思います。

また、前回に引き続きまして、本日は、大

竹委員にご参加いただいております。大竹委員は、住まい部会の委員として入っていただいていたところ、住まい部会でメンバーチェンジがございまして、大竹委員には、やはりボランティアのノウハウをよく知る方として、こちらの部会の方がふさわしいのではないかとということで、お願いして移っていただきました。本当でしたら、もう正式な部会委員としてさせていただきたいところなのですが、手続上、次回2月7日に行われる推進会議の中で正式に承認されることとなりますので、本日はご参加いただいて、推進会議で正式なメンバーとしてご承認いただくということでお願いしたいと思います。

それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局 次に本日の資料を確認させていただきます。まず次第、名簿。資料1、上の右側に書いてありますが、前回の振り返り。資料2、一般介護予防教室事業プロポーザル選定委員会結果報告。資料3が総合事業の変遷と今後の展望。あと2枚追加で、家事を仕事にということで、生活支援サポーター養成研修、緑のものとピンクのもの1枚ずつ。以上です。不足等ございませんでしょうか。ありがとうございます。

この会議は足立区地域包括ケアシステム推進会議介護予防・日常生活支援総合事業推進部会設置要綱第6条により、委員の過半数の出席により成立いたします。現在、過半数に達しており、この会議が成立しますことをご報告いたします。皆様からのご活発なご意見、ご質問をいただくため、スムーズな会議進行にご協力いただきますようよろしくお願いいたします。

なお、この会議の会議録は公開することとなっております。記録の関係上、ご発言の前

にはお名前をお願いいたします。

それでは、諏訪会長、開会のご挨拶をお願いいたします。

○諏訪部会長 早速議論に入っていければと思います。昨日もこの関係で呼ばれまして新潟に出張に行ってきました。長岡市なのですけれども、そこは町村が合併して非常に広域なところでやっていて、包括の数も11個ということだったのですけれども、地域によってやり方が全然違うので、足立は足立のやり方を見出していかなければならないということで、あまり答えがなくて手探りな感じでもどこもやっている状態なのですけれども、上手に手探りしながら前にお進めいただく。では、よろしくお願いいたします。

では、早速議事のほうをお願いいたします。

まずは、前回の振り返りからお願いいたします。

○事務局 はい。事務局から説明をさせていただきます。

まず、資料1をご覧ください。前回は令和元年9月20日に実施いたしました。傍聴者はいませんでした。

前回の部会では情報提供を3つ行いました。1つ目は国の動きです。「全世代が安心できる社会保障制度の構築に向けて」では、健康で長生き、高齢者も長く就労することの必要性についてお話ししました。「高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施」では、日本の医療保険制度は75歳に到達し後期高齢者になると、国民健康保険制度から後期高齢者医療制度の被保険者に移動し、保険事業の実施主体が移り、支援が切れてしまうということ。また、介護保険による介護予防の取り組みが繋がっていないことから、それぞれの事業がばらばらになっていて、国が音頭をとって、保健事業と介護予防を一体的に実施しようという制度が始まろうとしていることをお話ししました。

情報の2つ目に、「足立区がすすめていく介護予防事業と生活支援体制整備事業」について、お話ししました。区内25カ所ある地域包括支援センターの業務内容を見直し、令和2年度から介護予防教室の外部化を行い、あわせて各地域包括支援センター圏域に、生活支援コーディネーター機能を配置することをお伝えしました。外部化では、フレイル予防の要素である運動、口腔、栄養、社会参加の定着化、自身の身体状態の把握、介護予防の自主活動化への誘導を行うものです。

3つ目は、基幹地域包括支援センターの結城委員から、生活支援体制整備事業第一層、第二層生活支援コーディネーターについてお話をいただきました。

生活支援体制整備事業の目的は、多様な日常生活上の支援体制の充実強化と、高齢者の社会参加を推進することです。生活支援体制整備事業は大きく2つあり、生活支援コーディネーター機能の配置と協議体の設置が挙げられました。第一層生活支援コーディネーターは既に基幹地域包括支援センターに5名が配置されておりますが、令和2年度からは、さらに全25の地域包括支援センター圏域に第二層生活支援コーディネーター機能を配置することになったとお伝えしました。このとき、部会員の皆様からいただいたご意見を、第二層生活支援コーディネーターの業務ごとに確認していきます。

資料1の3、生活支援コーディネーター業務のところになります。

(1) 地域の支援ニーズと地域資源のマッチングでは、参加しない人や無関心層、これまで地域に関わりがなかった人をどのようにつなげるかが課題である。また、地域包括支援センターが実施していた介護予防事業の外部化により、関係性が希薄になり、支援に影響するのではないかとご意見をいただき

ました。

(2) 通いの場等の把握では、現場を知らないで紹介できないので、コーディネーターは訪問等による把握が必要であるとのこと意見をいただきました。

(3) 地域の担い手の発掘と育成。

(4) 通いの場の創出への支援では、通いの場の回数、場所、人材について、たくさんのご意見があり、場所の候補としては、通所事業所、学校、商店街の空き店舗、都住・UR、スーパーマーケット、社会福祉施設、サービス付き高齢者住宅等が出ました。サービス付き高齢者住宅では、住まい部会との連携が必要というご意見もありました。ほかに、インセンティブ(会場)等の補助についても検討する必要があるとのこと意見もありました。

(5) 通いの場の継続支援では、グループの課題の共有、ほかのグループの活動を知るために、交流会が必要と話がありました。

(6) 第二層協議体の設置では、関係づくり、コミュニケーションのとり方が重要で、自然と集まっていけるような会議体を目指してほしいというものや、高齢者の事業という視点だけではなく、様々な世代からの(子ども等)の視点で考えてほしいという意見もありました。

検討では、特に通いの場における場所の確保が難しいと話がありました。たくさん具体的な場所が案として挙げられましたが、そもそも借りられるのか、会場費がかかる等の課題があがりました。

そこで、前回の部会を受けてご意見をいただいた場所の候補について、通いの場になり得るのか、幾つか確認いたしました。ただ、利用が難しい場所が多いことがわかりました。まず学校の体育館等の利用について所管に確認したところ、現時点では通いの場の利用は難しいとのことでした。学校運営が優先

になるようで、地域のもので運動会等の単発なものを受けているが、教育委員会以外の事業では実施していないとのことでした。都営住宅の集会所についても、確認いたしました。各自治会が管理しているため、利用については各自治会の判断によるとのことでした。

その他、うれしいことに、足立成和信用金庫側から、店舗の貸し会議室を地域貢献で貸し出してくれるという申し出がありました。地域での活動場所の確保、把握については、今後も継続検討が必要であると考えます。同時に、令和2年度からは、第二層生活支援コーディネーターの業務が始まりますので、業務の一環として通いの場を発掘、確保をしてもらいたいと考えています。

次に、一般介護予防教室事業プロポーザル選定委員会結果報告です。資料2をご覧ください。この一般介護予防教室は、地域包括支援センターの業務内容を見直し、令和2年度から介護予防教室の外部化をする上で、リピーターが多い等の介護予防教室の課題を確認した上で、区の方針を示し、プロポーザル選定委員会にて事業者を決定しました。結果、特定事業者はセントラルスポーツ株式会社になりました。セントラルスポーツ株式会社は、大手のスポーツジムで、足立区では西新井と竹ノ塚に施設があります。

2、主な仕様としては、自主グループ化を目指した介護予防教室の運営、自主グループのリーダー役となる介護予防サポーターを養成する教室運営、体力測定会の運営、そのほかに提案限度額の範囲内で独自提案を示すことを示しました。これらの事業は、高齢者がこれまで以上に、自身の健康状態、生活状況、価値観に合わせて、介護予防の重要性を認識し、地域で介護予防活動を継続して取り組めるように支援し、参加者の循環と地域定着を促し、地域の居場所が徐々に増えてい

くことを目指して実施します。

3番、特定事業者からの主な提案では、自主グループ化を目指した教室において、区が指定する室内のメニューに加え、街歩きの要素を取り入れたウォーキング型教室の提案がありました。ウォーキングだと、会場を確保する必要がなく、その後も自主的な活動が長続きする効果が期待できます。

介護予防サポーター養成研修については、区が指定するリーダー養成のメニューを、さらにリーダーコースとサポーターコース、上級編と入門編の2つに分ける提案がなされました。参加者の心理的なハードルを下げ、より多くの方に気軽にサポーターになってもらえる効果が期待できます。

今後の方針は、第一層生活支援コーディネーターや、各地域包括支援センターと相談しながら、具体的なことを決めていく予定です。

4の今後のスケジュールですが、4月1日、事業開始に向けて、区民向けに令和2年度から介護予防事業がリニューアルすることや、介護予防全体を紹介する事業の周知を、リーフレット作成や、3月25日号の広報、介護保険料通知でご案内する予定です。

結果については以上です。

続きまして、資料3をご覧ください。総合事業の変遷と今後の展望です。総合事業は、介護予防生活支援サービスと一般介護予防事業に分かれます。ここで今回お話しするのは、介護予防生活支援サービスについてです。左上の図をまずはご覧ください。総合事業導入までの変遷と、今後厚生労働省が示すと予想されている総合事業の将来像が示されています。介護保険は、2000年（平成12年）に開始されています。ここに載っているのは2006年からになるのですが、2006年（平成18年）4月は、自立支援の視点に立った予防給付等が導入され、要支援2の

新設や、新予防給付の創設といった軽度者のサービス利用抑制による給付の重点化と効率化が実施されました。2016年、足立区では2016年10月に総合事業を開始しました。要支援の介護予防給付の一部、訪問介護と通所介護が介護保険から切り離され、従来の市町村で行われていた介護予防事業が合体して編成し直され、新しく生まれた制度です。表の上のほう为国基準で、下のほうが区独自基準、総合事業のところは、今まで国基準に介護予防給付、要支援1、2と書いてあったものが、下の区独自基準に下りてきたということになります。

総合事業の変遷と今後の展望をまとめます。高齢者、介護認定者の増加により、介護人材・介護予算の不足が起きるため、軽度認定者の支援を地域での互助に移行し、専門性の高い介護人材を重度の要介護者に集中させることが必要になるため、区独自基準で行うサービスが、今後さらに拡大することが予想されています。つまり、総合事業のところ、今後は要支援1・2だけでなく要介護1・2も、下の区の独自のサービスに入ってくることを、国は今後示してくると思われるものになります。なので、区の独自基準で行うサービスが今後さらに拡大することが予想されています。

そこで、総合事業で、市町村が地域の実情に応じて行う多様なサービス内容について、簡単に説明いたします。左の下の表をご覧ください。足立区では、現在、従来の予防介護サービスとサービスAの緩和した基準によるサービスを実施しています。一番左は現行のサービスです。内容は、国基準で、有資格者による身体介護、生活介助、生活援助を行います。右側のA、B、C、D、これが地域の実情に応じて行う多様なサービスということで、区が独自に決めていいものになりま

す。Aは人員等を緩和した基準で行うものです。訪問型サービスでは、生活援助があり、詳細は後ほど事業とあわせて説明いたします。Bは住民主体によるサービスです。主体がボランティアになります。自主活動して行う生活援助や多様な場で活動を行います。本日の検討事項にも絡む内容になっております。Cは、短期集中予防サービスです。保健・医療の専門職が居宅や地域での生活環境を踏まえた適切な評価のための訪問を実施した上で、生活行為の改善を目的とした効果的な介護予防プログラムを実施する3か月から6か月の短期集中予防サービスです。3か月から6か月の短期集中予防サービスを実施することで、介護が要らない状態まで回復させ、給付費を抑制する目的があります。Dは移動支援サービスです。通所型サービスの送迎や、通院等の送迎、前後の付き添い支援で、生活支援と密接不可分な移動について実施するものです。

資料3の右側をご覧ください。介護人材の不足は深刻です。足立区でも数年後には、介護人材が約1,800人不足する試算が出ております。人材の裾野を広げ、専門性に依りて役割分担を見直すことが必要です。現在の介護業界は、身体介護も生活支援も分け隔てなく専門性が不明確なまま実施されていることが多いのですが、介護人材が不足すればするほど、研修をしっかりと受けた訪問介護員や国家資格である介護福祉士等には、身体介護等の専門性の高いサービスを実施してもらうことが必要になります。買い物、掃除、ごみ出しなどの生活支援は、介護の資格を持っていなくても自分の経験を生かして地域貢献することができるものです。

2019年2月、去年の2月から、訪問型サービスAにおいて、区が指定する研修の修了者が生活支援サポーターとして働くこと

ができる養成研修を開始しました。そのチラシが緑とピンクのもので、緑のほうが元気高齢者向け、ピンクのほうが稼働年齢層、子育て世代の主婦等をターゲットにしたものになります。この研修は、足立区が認定する新しい介護の担い手です。13.5時間の研修で修了いたします。生活支援サポーター養成研修の実施状況、令和2年1月現在ですが、6回の養成研修で135人が修了しています。そのうち24名が事業者に登録し、うち3名が初任者研修を受講しております。初任者研修というのは、130時間の研修を受けて訪問介護員としてサービスできる資格で、つまりキャリアアップする方も生まれているということです。

介護予防、生活支援サービスについては以上です。

では、議事を諏訪会長にお願いいたします。

○諏訪部会長 前回の確認、それから付託事業、それから総合事業とかの話なのですが、1個1個、もし確認事項があれば話をしたい。前回の振り返りはよろしいでしょうかね。

では、2番目の選定委員会の結果は何かありますか。

ちょっと私から質問していいですか。これが、要するに前回言っていた包括の業務を外部委託するという話？

○千ヶ崎課長 そうです。

○諏訪部会長 ということは、このセントラルスポーツが足立区全域をやるということですか。

○千ヶ崎課長 そうです。

○諏訪部会長 これは2カ所しか拠点がないということなのだけれども、拠点は広げてやるのですか。

○千ヶ崎課長 そうですね。会場については、これまでの各包括でやっていた場所と同程

度の会場は設けたいと考えています。

○諏訪部会長 足立区全域をカバーするということ？

○千ヶ崎課長 カバーするということです。

○諏訪部会長 わかりました。

○千ヶ崎課長 そのこのところについて、もう少し補足しますと、今、諏訪先生がおっしゃったとおり、これまで地域包括支援センターに区から委託して、行ってもらっていた介護予防事業が2つあります。介護予防教室というのと包括らくらく教室という、この2つの教室をお願いしていたのですね。しかし、包括というのは、やっぱり現場で個別の支援等に注力していただきたいという思いがあって、外部化できるものは専門の事業者にお任せして、その分、例えば個別支援のほうに回していただけないかということを考えております。令和2年度からは、介護予防教室のやり方や構成を変えて、教室が終了した後も自分たちで何とか介護予防の継続ができるような形に向けられないかという考えを入れて、こういった教室を展開していこうと考えております。

○諏訪部会長 公金を使っているのだから、これくらいの事業を幾らで頼むの。

○千ヶ崎課長 3,800万円は上限額で、今回、プロポーザルの特定というのは、この事業者と契約するために、これから打ち合わせしますよ、その事業者を決めましたということですので、これからは、セントラルと詳細のところを詰めて、契約のほうに入っていくことになります。

○諏訪部会長 量的な目標とかは、当然置いているんですよね。どれぐらいの人数でやるかとか。

○千ヶ崎課長 そうですね。回数で言うのと。

○諏訪部会長 まあまあ、いいです。それな

りのお金を使うのでちゃんと量的な目標とか。それから、ポイントはなるべくボランティアに続けてもらうということなのだけれども、企業がボランティアの活動の支援をそんなに上手にできるのかなというのは、なかなか疑問ではあるので、そこは本当に上手にできるのかなと。そのあたりをどういうふうに向こうにやってもらえるのか。

○千ヶ崎課長 事業者と打ち合わせするので、やはりその自主化ってなかなか難しいという話は、正直おっしゃっています。

○諏訪部会長 お客様扱いしたら、自主化にはならないですよ。

○千ヶ崎課長 その中でも、ノウハウを持っているということで、さっき1つウォーキングなんていうことが出てきましたけれども、なるべく自分たちでやるということ、徹底したいということをおっしゃっていました。例えば上げ膳据え膳でもう全部、その事業者、セントラルさんがセッティングしてあげるではなくて、地図は自分たちで持ってきてくださいとか、自分たちで自主的に動けるようなことを引き出すような講座をやるということをおっしゃっていました。

○諏訪部会長 お客様に「いらっしゃいませ」と言うてはいけないので、そういうことができるかなというのがちょっと疑問ではあるのですけれども、まあ、頑張ってください。

○千ヶ崎課長 はい。ありがとうございます。

○諏訪部会長 包括は、そうすると、予防のことはあまり関わらなくなるということ、直接の事業として。

○千ヶ崎課長 そうですね。事業には関わらないのですが、ただ、この講座と包括とを全く切り離すのではなく、例えば包括には何回目にはこうやって来てくださいというような仕組みは残しておこうかと思っているのです。この後、地域づくりという面で今包括

にも少しお願いしようと思っているので、そういった橋渡し、そこを卒業した人を地域につなぐとか、そういった人たちと一緒に伴走していくというような、そういったところをやってもらうので、全く切り離すという考えではないです。

○結城委員 包括の結城です。今はらくらく教室を包括がやっていて、その終わった方々が本来自主化していればよかったですけれども、包括の教室にたまってしまっています。一部の包括ではちゃんと自主化に向けてやっています。今回の体操の外部化については、当然その後のフォローもやっていると包括はいっぱいになってしまうので、一旦、今やっている教室は外部化して、終わった後のフォローだったり、その後の支援を包括がメインにやろうというような体制へ、変えていただいたところになります。そうすることにより包括の業務が減るように見えます。要は、だんだん卒業生とかが増えていきますので、そこら辺のフォローとかをしなければいけなくなってくるので、そのフォロー後、どのぐらい包括の手を離れるかとか、そこにちょっとポイントが出てくるのだと思います。

○太田委員 この事業を見直して、どのぐらいの期間を想定しているのですか。今委託しますよね。これは何年契約ですか。

○千ヶ崎課長 基本、単年度なのですがけれども、この事業者は、来年度、事業を実施している中で評価をして、問題がなければ3年間はやっていただけるように今考えております。

○諏訪部会長 自主化のネックになっているのが何かですよね。多くの場合はリーダーと場所だ何だということなのだろうと思いますけれども、そのフォローアップを包括がやるというと、結局今までと同じような気も

するし、いや、そこに注力できればいいという感じもするし。しかし、民間で言う自主化のところまでフォローアップができるかなと、そこはまた何かどうかなという感じもするので、そのつながりの部分ですよ。ちょっとよく考えて設計しないと、なかなか。教室だけ外部化する感じのイメージがちょっとわからないですけども。

○結城委員 今ですと、教室がオープンになって、全10回の教室らしいんですけども、そのうち3回ぐらいを包括が少しまた卒業間際に入りまして、うまくスイッチができるようなつくりには、これからする予定です。ただ、初めてのことなので、どのぐらいセントラルさんが、どういうノウハウで、どういうふうにすすめていくのかというところではこれから養成の方と一層も含めて詰めていく予定です。

○千ヶ崎課長 来年度も1年待ってどうだったと評価するのではなく、もう走り出して常に評価をしていって、軌道修正しながら。最初から100%うまくいくとは全く思っていないので、本当に課題があったら、じゃあそこをどうやって直していこうかということをやりながら進めていきたいなと考えております。ただ、やっぱりこれから高齢者が増えていく中では、自分たちでやっていくという考えを少しでも落としていかないと、ちょっともうパンクしてしまうと思うのです。今までみたいなリピーターで回っているような教室だと、一部の人にしかサービスが行っていないわけなのです。だから、行政からそういったサービスを提供するとなれば、やっぱり広く行き届かなければならないという考えの下、そういった自主化に向けて行政としては力を入れていきますという考え方でやらせていただいています。

○諏訪部会長 結局、ポピュレーションアプ

ローチをしようというのだから、いろいろな地域活動の場に埋め込まれていかなければいけないのですよね。

○千ヶ崎課長 そうですね。

○諏訪部会長 そのところが、結局老人クラブの活動、自治会の活動、今のボランティアサロンでの何とかというふうに埋め込まれていかなければいけないので、その埋め込みの部分是谁かがちゃんとやらない限り、教室に来ている人だけのものになるというようなことは変わらないので、そのところをちゃんとフォローしてあげないと。

○千ヶ崎課長 おっしゃるとおりですね。

○大竹委員 私も西新井のセントラルのジムに通っているのですけれども、確かに通っているのは高齢者が多いのです。だから、イメージ的にどういう自主グループができてくるのかというようなのだけでも、高齢者に対する対応というのはある程度できるかなという気がするのですが、それを組織化していくというのは、それはなかなか難しいかなということですね。イメージがちょっとわからないのですけれどもね。

○千ヶ崎課長 あとは、組織化もそうなのですけれども、既存のそういった団体に入っていくという道筋も、包括を通じて、考えたいなと思っています。そこは、今、諏訪先生がおっしゃったような、例えばそれが老人クラブだったり、ボランティア協会だったり、そういったところに、自分のやりたいことがちゃんとできるような道筋を見つけられるようなことを考えないといけないなと思っております。と言うはやすしで、実際にどうやってできるのかというのは、私も正直不安がいっぱいです。しかし、やっぱり一步を動き出さないといけないかなと思っているので、少しずつ軌道修正して、いいものをつくらないといけないなと思っています。

○諏訪部会長 よろしいでしょうか。

それでは、この後は、総合事業の、B型の話はするんですよね。

○千ヶ崎課長 そうですね。きょう皆さんからご意見をいただきたいのは、今のような視点なのです。例えば今どの業界でも人手不足というふうに言われていること、それから、その一方で高齢者はだんだん増えてきて、行き場所を探しているような人も中にはいるのではないかと思われるわけです。そういった中で、皆様の団体の中では、人をつなぐ、人をつなげられることについて、今どういふふうな状況なのか、課題があるのかとか、例えば採用してもなかなか集まらない状況なのかとか、人にまつわる各会の課題とか、そういったところを教えていただければなと思っております。

○諏訪部会長 もう一回議題を言ってくれませんか。人の話というのは、この5の(1)、(2)の話ですか。

○千ヶ崎課長 そうですね。今後の住民主体サービスの導入の方向性ということなのですけれども、国が今示している、先ほど伝野から資料3のこの中で、左下のところですよ、こういうサービスを国は示しているんです。これは地域包括ケアシステムの中でこういうサービスというのを各自治体でこれからつくっていただくという話なのです。この中で今足立区として取り組んでできているのは、Aというところの、さらに訪問型のサービスだけなのです。高齢者のご自宅に行って、ごみ出しとか、買い物とか、そういう日常生活にまつわるサービスを提供する人を、先ほどのチラシで募集して養成して、そういう人たちを事業者と結びつけて派遣するサービスとがあって、今、このAというサービスが実現できているわけなのです。

その実績というのが、この右下のところの生活支援サポーター養成研修の実施状況ということなのです。今まで6回養成研修して、たくさん的高齢者が来て、24人が事業者の登録につながって、サービスを提供していると、こういった現状があります。ただ、これは135人なわけですけれども、足立区の人口から考えると、もっとももっとこういった人たちというのは、いるのだろうなとは思っているんです。また、B、C、D、それからAの中でも、今訪問型だけと言いましたけれども、通所型といいまして、介護通所、通所の介護サービスと同じような総合事業の中でもそういった通所のサービスというものもあるので、そここのところのサービスをつくるということも課題として残っています。なので、これを検討するに当たって、皆様方から現場の人の流れだとか、皆さん、どういうことを、よく言われる、よく考えていらっしゃるのかとか、そういったことを聞いて、このサービスを、どういったものをつくっていったらいいのかという参考にさせていただければなというふうに思っているのです。というのが、きょうの主題でございます。

○諏訪部会長 ですから、人の話もあるし、どういうサービスをつくったらいいかという話もあわせてするということですか。

○千ヶ崎課長 そうですね。そういうことになります。

○諏訪部会長 そういうことのように。取っかかりとして、生活支援サポーターというのは、関わっていらっしゃいますか、指導者の立場で。

○倉澤委員 訪問介護のほうには登録していただいている方もいらっしゃいますけれども、じゃあ、実際にお仕事をすごくたくさんしているかといったら、そういうわけでもないし、登録されている方も結構少ないです

ね。

○千ヶ崎課長 まだ少ないですよ。

○倉澤委員 実際のところ、どうなのだろうと、私たちも見ています。

○諏訪部会長 それは、お客さんからあまり、そうそう知られていないし。

○倉澤委員 それもありますね。

○諏訪部会長 ここの簡単な家事だけというのは、来ないということですかね。

○倉澤委員 いや、そんな。制度的なものなので、このサービスではここまでしかやらないというルールがありますけれども、サポーターになられた方たちが本当に行ってやろうと思って資格を、研修を受けているかというところも、また1つあるかなど。この人たちにもできるし、今、今までどおりのヘルパーさんも別にそこの現場に行ってはいけなわけではないので、お給料の問題とかちょっと変わってきますけれども、抱えているヘルパーさんに行ってもらおうというのは事業所としてもありなのでなかなか。もっと増えれば、またサービス自体も増えて、サポーターの人も増えれば、また変わっていくかもしれないですけども、まだちょっとぎりぎり始まったばかりというか。

○千ヶ崎課長 31年4月から2年間をかけて、そのサービスに皆さん移ってもらう、要支援1、2の方が移ってもらうのです。なので、まだこのサービスを使える方というのが、全部出そろっているわけではなくて、少しずつ少しずつ増えている状況なので、そのサービスが、まだ完全には発生していないということ。だから、登録しても、仕事がありませんという場合もあったりするらしいのです。なので、そこが今は過渡期というか転換期なので、ちょっとそこがうまくとりづらいなというところはあるのですけれども。要は、人も徐々に増やしていかなければ

ならない。サービスは徐々に切りかわっていくのだけれども、この2年後、来年度末には、全員がそれに置き換わることになるので、その時点では、もっともっとういった人たちを、サポーターをつくっていかなければならないなというふうには考えております。

○諏訪部会長 しかも、5、6%ぐらい参加するのではたっけ。

○倉澤委員 そうですね。

○諏訪部会長 それで認定の切りかえに合わせて徐々にこっちに移行してくださいというふうに。

○倉澤委員 切りかえなので、もともとサービスを受けている人たちが、この緩和型のサービスに移っていくわけなので、ここには今までどおりのヘルパーさんが行っているでしょうね。変わったから、じゃあ、変わりましたよというわけには、やっぱりなかなか難しいところもあるし、逆に今ヘルパーさんも高齢化しているとなると、高齢のヘルパーさんが簡単な家事だったらオーケーねとなった場合に、その資格を持っているヘルパーさんが行くというのも、なかなかうまい量の。

○諏訪部会長 5、6%単価が落ちるのですか、報酬が。

○倉澤委員 そうですね。落ちます、ヘルパーさんは。事業所さんごとによって違いますけれども。

○諏訪部会長 違いますね。もらえない人もいれば、変わらない人もいます。

○倉澤委員 そうですね。

○諏訪部会長 だから、お客さんもまだあまり大きな動きはないということですね。

○倉澤委員 まだですね。

○諏訪部会長 何か。

○結城委員 包括の結城です。今のこの生活支援サポーターのほうですが、現場サイドからいうと、この制度は使いづらいというのが

本音です。というのも、生活支援サポーターさんというのは、できるものが、この制度では要支援1、2の方のヘルパーの業務、なおかつ家事援助のみという形になっていますので、実は要支援の方とかというのは、いつ何どき介護になるかどうかがわからないとか、身体が伴うことがあるとなると、その方は派遣できないという形になるので、ケアマネージャー側からすると、生活支援サポーターは使いづらい。それだけのためのヘルプはいないので。であれば、身体、家事援助ができる今のヘルパーさんを入れておいたほうが逆に安全であるというところがあるので、非常に現場としてはかなり使いづらいという形になります。なおかつ、先ほど上野委員からあったとおり、そのうち介護保険制度が変わり要介護1、2が要支援と総合事業のほうに入ってくるとすると、なお余計に生活支援サポーターさんの使い方がちょっと正直しんどいという形になっていますので、現場からすと「うーん」というふうに、ちょっと二の足を踏んでいるというのが、現場ですね。ただ、介護現場ではこれが突破口となって、福祉自体に人材が全然今入ってこないの、これをきっかけにして、うまくスキルアップをしていただいて、人材を入れるという意味でのすごく期待をしている面もあるのです。

例えば2年後も、果たしてなじむかどうか、ちょっと苦しい、不安が多いかなと思ひまして。恐らくきょうの話であると、サービスBの早めの創設であったり制度設計をしていかないと、ちょっとやっぱり将来は厳しいのではないかというふうに私は個人的に思っているところです。

以上です。

○中島委員 私はシルバー人材センターなのですが、ご存じのように、シルバー援助サービスというのは家事援助サービスなので

すけれども、全然資格がない方、逆にヘルパーさんが来たところやっているのに、ヘルパーさんから体にさわってはだめですよとか言われたと。家事援助のほうは、私はシルバー人材のほうは、仕事の内容は単純で、浴室の清掃であったり等、交替でやっています。どこかそのあたりのURとかなんかで……で出てくださいというときに出られないで、かわりに出てくださいといったら、留守番とか、ペットも。ちょっとシルバーも今回そういう動物介護のほうはできないということになりましたのですけれども、今まではそういう、ちょっと小旅行をするので犬、猫に餌をやってくださいとか、そういう作業なのですね。だから、そういう作業をどんどんどんどんするためには、周知するには、広告、チラシをもう配るしかないんです。口コミで何とかさんに頼んでみたら。そのかわりさっき言いましたように、単純作業です、清掃とか留守番であったり、話し相手というものもありましたね。それと買い物を代理でスーパーに買いに行くとかということ。

将来性は、どんどん高齢化するので、その職場の場はたくさんあるんです。働いてください、パートで来てくださいと。そのかわりに毎日来る、毎日お願いしますということではなくて、頼む方も、高齢者はそんなお金がないので、週に2回であったり3回であったりする。痛しかゆしですよ。こっちもたったその1人のために1週間空けるわけにいかないの、私は月、水、金がいいですわと言ったって、いや、私は木。1回来てくれりゃいいんですよという感じで、マンパワーの振り方がちょっと難しいという。だけど、そういうことに、なくちゃならない職域なのです。ただ、するほうも年をとっていくし、されるほうも、高齢化にずっといって、最初ありましたように人員がどんどん

どん。当初は何百人という応募者がいたのですけれども、今はもうそんなにたくさんいらっしゃいません。そのあたりも、私どもの悩みどころです。担当している方がいらっしゃらない、少なくなってくる。それと、資格を持っていないので、単純作業ですと。ヘルパーさんと合致したら、一緒に来たら嫌だなどという方もいらっしゃいますね。いつも怒られると。「いじるな。そこ、手を出さないで」と。「私、ショックだわ」とか言って。そのあたりの折り合いも、ヘルパーさんとの折り合いをちょっとうまく。そのあたりがちょっとあるのではないかなと、まずね。

○諏訪部会長 怒られるというのは、自立支援だからやらないようにと。環境を変えないようにと指導されるということですか。

○中島委員 はい。とかとって、ヘルパーの、じゃあ、あなたもライセンスを取って、資格を取ったらいいじゃないですかと。「もう私はそこまでしては」と、やる気はあまりということですからね。そのあたりちょっと考えていただきたいところでもありますね。僕も非常に、例えばですよ。補助して身体にふれただけで、「あ、危ない」と怒られたと。

「手を出さないで」と。それは行くんだから、普通「おっと危ない」と、止めてあげますよね。だから、何かそういう雰囲気があるみたいなんです。ヘルパーさんとシルバー人材でする人との関係が。やっぱり人間、資格なのですね。資格を持っていると、上から目線だから。

○諏訪部会長 それは、ヘルパーさんとシルバーさんが一緒に入る現場があるんですか。

○中島委員 ありますね。

○諏訪部会長 そこでのことを言っていますか。

○中島委員 そうそう、そういう場面があったときに、そういうことがあるから嫌だと。

いつもそういうことではないんですよ。ただ、僕たちに、そうか、そこまで厳しく言わなくても、部屋の中だったら。そんな手をかけたくらいだったら、「ああ、ありがとう」と言ってもらったらいのだけれどもなど。そのあたりの折り合いですね。まあ、そういうことです。

○諏訪部会長 では、Bの話になってきましたので、Bの話を含めてなのですけれども、Bというのは、住民のボランティアな活動に、制度から少しお金を出してやれるようにしようということなのですけれども、今何か素材はいろいろ集められているのですか。成功してやっているというところはいっぱいありますよね。

○千ヶ崎課長 そうですね、はい。一応情報を集めているのですけれども、今、具体的に足立区で言えば、シルバー人材センターだったり、ほがらかネットワークが行っているサービスだったり、また、あいあいさんの「あったかサービス」だったりとかそういったもうサービスが出来上がっているので、そういったところをB型サービスとして位置づけるというのは、1つ考え方としてあるのかなとは今思っています。

ただ、そのときに気になるのは、これは私だけなのかもしれないですけれども、そういうボランティア的な発想というのと、役所からお金が出るからやってくださいということとの兼ね合いというのですかね。一方で、隣近所のあの人が困っているから、じゃあ、ごみを出してあげようよと言っているときに、私はボランティアでやる。でも、あの人は役所からお金をもらって、ごみを出すと。そういうのが混在することというのは、皆様はどのように思われているのかなというのが、正直そこを聞きたいのですね、私。

○大竹委員 それは個人、個人の考え方だか

らね。ボランティアがいいのか、有償ボランティアがいいのか悪いのかというのは別の援助として、やっぱりその人がどういう形でそれに対応しているかということじゃないですか。結構、今までボランティアでやっていたところが、業者が入ってきているみたいな、お弁当の問題なんかもそうですし、そういうグループがなくなっていってしまうという。だから、逆に言えばボランティアで潰しているよというのがとてもあるんだと思う。

○千ヶ崎課長 そうなのです。その辺の課題というのを、変な言い方かもしれないですけども、昔からの日本人のいい部分みたいなものを、どんどん否定していくような気がしてならないわけなのです。制度をつくっていくことによって。

○中村委員 千ヶ崎課長の言うとおりの。俺が、この関係というかな、老人クラブにしる、いろいろなものに入ったきっかけというのが、近所に筋萎縮症の人がいるんだけど、保健所からごみ出しを手伝ってあげてくれないかと連絡があって。それで、ついでに安否確認してくれないか、と。これが最初なんだ。それから、この道と言っちゃおかしいですよ。ボランティア、老人会だったり自治会だったりいろいろなことに携わった原点が、このごみ出しだったんです。だから、昔はそういうふうになっている人がいたら助けようよとなっていたでしょう。ところが、今は、友達なんかにこういう人がいるんだけど、ちょっと車を出してくれねえかという「幾らくれる」と、こうなっちゃう。だから、もうちょっとついでだから言っちゃうけど。

○諏訪部会長 どうぞ。

○中村委員 介護保険にしてもそうだし、事業所のことにしてもそうなのだけれども、全て経済効率ばかり考えて、心を忘れちゃっ

ていると俺は思っているの。介護保険もそう。コミュニケーションの場が少なくなっちゃって、経済効率云々ばかり言うてしまうから、そういうふうになってきたのではないかと、私自身は思っているのよ。やっぱりコミュニケーションと。国の中で時間を減らされちゃったよね。最初はもっと長かった時間、今は45分でしょう。ねえ。その中には、コミュニケーションをとりながら一緒にやるというあれがあったはずなんです。それがなくなっちゃったでしょう。だから、そういうことの中で考えると、介護関係の事業者に、きつい嫌だよと、やってやろうという気にならないのは、やはり社会的な身分保証がないということじゃないかと俺は思っている。もうちょっとね。大変な仕事なんですよ、これ。私も十何年の介護の経験がありますし、3代にわたって、おばあちゃん、母、義理の母親、女房と、ずっとやってきたけど、そういうものを考えたときに、やっぱり心を忘れちゃいけないと思うんだよ。だから、介護事業所だってそうだと思いますよ。もっと社会的身分をはっきりさせて、もっと大変な仕事なんだから、それだけの報酬を取っていいですよぐらいの社会的なあれにならないと増えないと思いますよ。

○諏訪部会長 社会的身分とか仕事ということというのと、やっぱり生活支援サポーターというのは、何となく中途半端。

○中村委員 そう。それともう1つあるのだけれどね。俺、前回言ったのだけれども、皆で集まっているいろいろコミュニケーションをとりたくたって、学校がだめ、どこがだめ、どこがだめ、みんなこうなっちゃう。集まるところがないの。都営の自治会の会長にももう何回か会ったから話ししたら、会長はわかっている。ところが、役員会にかけると否定されてしまう。だけど、こういう集まりは趣味

の場ではないし、お金を取っている場でもないし、本当に社会的なあれでしょう。地域のために使いたいと言っているのだから。区もそうだし、社協さんもそうだけれども、もうちょっとアプローチして、何とかこれをやらないと場所がないのよ。今現在、私がやっているみんなの家なんか、この間、結城課長も知っているけど、あれは2005年からやっているんですよ。年寄りと赤ちゃんも一緒になってみんな来るという場所というのは少ないと思うんですよ、足立区の中でも。

ただ、今現在やっているところは、かなり急な階段があるんですよ。だから、いつ事故が起こるのではないかと、そのほうが心配なのよ。どんどんもっと皆さん来てくださいと言いたいけれども、こういう階段じゃ、いつ転んで、けがした、骨折しました、ひどいときには亡くなっちゃった。この責任は誰がとるのかということになったときに、困ってしまう。保険はかかっていますよ。だけれども、あまり誘えないの。本当は2番目のこれだって、今、喜ぶのは、今現在、各教室の体操へ行っている人たち。そこへ行っていない人たちは、恐らくあまり行かないと思いますよ。それよりも、そういうみんな集まって、いろいろな話をできる集まる場所、そういうところを充実させたほうが良いと私は思っている。

少し勝手なことを言い過ぎて、すみません。

○千ヶ崎課長 ありがとうございます。

○諏訪部会長 住民主体のB型の話もあるのですが、総合事業に乗っかると非常に面倒くさいと。要は、該当者しか入らないから。その人たちだけを集めた場なんて地域にないですよ。だから、大体の区も、そこで工夫をしていて、そうでない人たちもいっぱい来てもお金が出せるようにするとか、そういうことをしているのよ、それはやっぱりち

ゃんとうまくやっているところを研究しないといけない。

それから、既存のところに乗る、既存のところとはちゃんと常に意見交換をしたほうがいいですよ。こういう条件なのだけれどもと。この場でやってもしようがないので、ちゃんと、あいあいさんと、ほがらかさんと、シルバー人材さんとかと、こうだったらどうかという話を詰めていかないとだめだということ。

ただ、意外と助成金の意味というのはあって、それだったらやりたいという人が、七十何万もいれば、必ず新しくいるから。なので、公募すればいいんですよ、いい要件ができたなら。そうしたら、拾われます。だから、既存のところを諦めるなんていうだけの発想でやったらだめだと思うのですけれども、そういう感じで、具体的に検討を、皆さんの意見を聞きながらやったらいいのではないですか。

○千ヶ崎課長 わかりました。

○諏訪部会長 それからあと、私は外から足立区を見ていて、話を聞かないなと思うのは、住民のちょっとした助け合いの、有償でやっている話を全然聞かないのですよね。やっているのかもしれないけれども。いろいろな地区で、自治会が1時間500円ぐらいでやったとか、そういうところが全国各地、都市部だっていっぱいあるわけですよ。そういうのがほとんど話題にならない。サロンの話は聞くのだけれども、そっちを広げていくことを考えたほうが良いと思います。身近な地区の助け合いで、そういうグループをつくっていくことをやっていったほうが。それはもう領域としてはシルバーさんの話と重なるところがあるのだけれども、それは地域の見守りとして仲間うちでやるというのに意味があるので。そういう活動をどうやって増やすか。そのためのちょっとした呼び水みたいな

助成金をどうつくるか。それは介護がやるのか、地域福祉のほうがやるのかかわからないですけれども、あまり介護でやらないほうがいいと思うのですけれども。そういう検討をちゃんとしたほうがいいと思いますね。それが分厚くあれば、自然と身近な地域で済むものはそっちに流れていくので、ヘルパー事業所には、やっぱりちょっと心配で、家事というけれども、本当は絶対いろいろ見守れて、プロがちゃんとやらなければというのが行くようになってくるので、むしろ身近な地域が資源を自然に増やしていくということをもっとちゃんと考えたほうがいいと思います。本当に聞かないですよ、足立は。あるのでしょうか。

○結城委員 ないことはない。

○諏訪部会長 でも、何かあまり話題として出てこないんだよね。

○結城委員 もともとは、NPOのほがらかネットワークなんかは、そういうスタンスで始めていると思うのですね。高齢者の方々がボランティア的な強い気持ちで人を助けていく。ただ、そうはいつても、ボランティア的にやっていくのは厳しいだろうと。持続可能なところでいくと、だんだん利用料の金額が少なかったみたいでだんだん上がってきています。

○諏訪部会長 そうやってちゃんとやっているのは、それはそれであっていいのだけれども、もうちょっと身近な地区で、もっと素人くさく、それこそ草むしりだの、ちょっとした移送だの、あまりうちの中に入らないけれども、困っているようなことをやるような、そういう活動が。

○大竹委員 事業者に登録するとかって、やっぱりボランティアは意外と嫌がるものですかね。やっぱり自由にやりたい要求があるらしいので。

○結城委員 今の話で身近な地域での高齢者のボランティア活動について、例えば今サロンのほうで、通常サロンでは普通に来てお茶を飲んだりで終わっているのですけれども、あるサロンは、やっぱり買い物に行けない人がいて、少し手伝ってあげようじゃないかといって、たまたまそこは福祉施設と合同でやっているものですから、デイサービスの車が空いているよということで、そのデイサービスの車を使っていこうという話になりました。サロン参加者が歩行の不安定な人の歩行支援を手伝い、運転ボランティアを1層地域支え合い推進員が探してきて、買い物をするサービスがある地域で始まりました。

ただ、問題はやっぱり事故をしたときにどうするかとか、特にガソリンは。今は、たまたまデイサービスの人が「いいよ、社会貢献だから」と言って、その保険も何とか車の保険でカバーできる。あとは、サロンなので、サロンの保険で何とかしましようということで結構手厚くはして、ようやくそれで成り立っているのですけれども、継続していくというところとある程度何か後ろ盾みたいなものがないと、多分続かないでしょうし、不安ですね。このサロンがすごくうまくいっていたのですけれども、そろそろ終わってしまう。なぜかという、運転ボランティアさんが、ちょっと自分の家での介護が強くなってしまって行けなくなってしまったのです。途端にもう終わってしまうのですね。そんなことを継続するには、やっぱりある程度の後ろ盾とか何かがないと厳しいと思います。

そんなことで、短期的なら多分できると思いますが、その持続性をどう保つかを議論していかないと厳しいかなと。

○諏訪部会長 ただ、まあ、まずはやってみるというのを増やしていかないと、そっ次の議論にもいけないので。

○結城委員 今回はすごくいいトライで、サロンの皆さまは結構無理をされているかと思って聞いてみたのですけれども、初めはちょっと不安だけれども、やったらすごくよかったということで、皆さんもう自分たちを受ける側かと思ったけれども、そうではなくて自分たちも活性化できるということで、逆に来ることだったり、やることにすごく楽しみとか、やりがいを感じたと言って、ぜひチャンスがあればまたやりたいというふうに言っていたいるのですね。あとは、運転ボランティアを探すことに今動いていますけれども、そんなふうにいけば、またすぐに再開できると思って、非常にいい動きかなと思っています。

○諏訪部会長 あとは、Bでやったほうがいいのは、割と常設に近い通いの場ですね。住民がつくるね。これは、サロンは大体月1回ぐらいなのですから、それは会場をいちいち借りなければいけないから、それだけがすごく大変、それがすごく大変なことで、会場のことは先ほど来あったのですけれども、そこは結局言い続けるしかないというのと、学校だって、どこかにするする入り込んで実績をつくってしまえば、よそがやっているぞと言えば、教育委員会に言ったら、だめと言うに決まっているので。だから、教育委員会がだめと言ったから諦める必要なんか全くないので。

○中村委員 だから、都住のあれに一生懸命アプローチしているのだけれども、会長はわかっているのだけれども、役員がそういうふうに言うから、趣味やなんかでやっているんじゃないのだから、そこにもやっぱり年寄りがいるんですよ、かなりの高齢者が大勢。それも一緒に遊びに来られますよと言っているのだけれどもね、わかってくれない。本当にいらいらしてしまう。

○結城委員 1つURさんなんかは、逆に使ってくださいと、本当は住民のものだけれども、区だったり公共性のある事業については、逆に貸したいという。向こうも折れてきていますので、ちょっとずつ広がってきていますので、もうしばらく。

○中村委員 いやいや、すぐやれとかそういうことではなくてね。ただ、要するに、都住なんかの集会場を普段の日にあけておくのだったら、それを地域のために使ってもらうことは結構なことだと俺は思っているのだけれども、役員会にかかるると否定されてしまうのだ、どういうわけか。会長さんはわかっている。もう去年の暮と、ことしの正月に会って、こういうわけなのでと言ったのよ。だから、すぐに結城さん、せよということではなくてね。

それと、みんなのうちのスタッフで、これをつくってくれたおばあちゃんは、やっぱり具合が悪い人のところへ、しょっちゅう手伝いに行っていたの。それで、自分自身がスーパーへ買い物に行くから、何が足りないの、あったらついでに買ってくるよと。この気持ちをずっとたくさん皆が持ってくれたら、もっとよくなるなと思っているのだけれどもね。

○結城委員 今度、東伊興で、老人クラブさんがやるあの取り組みを紹介してくれたら、それいいじゃないですか、小学校を使う。

○中村委員 東伊興で。ああ。地域で全部集まって。集まるね。今、これからやるのだけれども、伊興地域、自治会、子ども食堂のお母さんたち、いろいろなお母さんたちの集まりの人たちと一緒にイベントをやろうと企画しているんですよ。東伊興小学校の講堂を貸してくれるというから、大々的にイベントを持ってね。ついでに、商店街も巻き込んでしまえと。そういうふうで、ビラを張っても

らったり、そういう協力ができるだろうと。

私は、今度の会議で、26日に言うつもりだけれども、今議論しているのは大人の議論なのですね、大人ばかりなもの。だから、ここへ、子ども会があるならば子ども会の子もさんたちの意見も聞きたいから、入れてやろうかと提案しようかと。ここで先に言ってしまったのだけれども、思っているんですよ。それで、とにかく伊興地域は、6つの老人クラブと町会5つぐらいを巻き込んで、商店街をついでに、西口だけれども、それで巻き込んでイベントをやろうと。子ども食堂のお母さんたちも参加してもらおうと。お母さんたちの集まりにも参加してもらおう。子どもさんたちが習い事をしているのだったら、それを発見してもらえと。そうしたら、嫌でもお母さんたちは来るだろう、父兄がね。そういうところから話を持っていけば、もうちょっと地域がこうなって、よくなるかななんて、私自身は思っているのですけれどもね。

○諏訪部会長 そういうイベントは、すごくいいことですよ。それでまず飾りをつくって。

○中村委員 顔がまずわからない。知らない。当然話し合いに行けば、顔見知りになれば、スーパーで会ったときに知らん顔をしているのではなくて、「こんにちは」とか「どう、元気？」とかいうことにもなるだろうし、それが地域発展のための1つの手かなというふうには考えています。

○結城委員 今おっしゃられたように、老人クラブさんと町会と、会場は小学校。東伊興小学校の体育館を使わせていただけてって、これも教育委員会に真正面からお願いしたわけではなくて、中村さんを中心とする地域の方々が校長先生に交渉していただいて門を開いていただいたということです。

○中村委員 そう。学校にもつながるね。

○中村委員 昔は、だって、学校とか公民館というのは、地域の集まりの場所だった。今はそうではなくなってしまったけど。

○諏訪部会長 地域の人がやりたいというものは、普通は無下にしないですよ。

○中村委員 そう。だから、地域でこういうふうにやりたいのだけれども力をかしてくれますかと持っていけば、何とかなるのかなと思う。

○千ヶ崎課長 そんな中で、さっき話があったとおり、足立成和信金金庫さんが、2階の会議室みたいなところを地域に開放したいという話もあったのですね。ヨーカドーさんからも何かその話があったりとか。

○中村委員 竹ノ塚にはないんだ、話をしているのは。かみしんが貸してくれるよ。

○千ヶ崎課長 そのような事業者の方々が、少しずつ何かそういうふうに貸してくれるよという機会が少しずつ増えていけば。

○中村委員 1回やってみて、その実績をつくれば、あそこでこうやったよというのが出れば何とかしてくれる。

○千ヶ崎課長 あるのですよね。ただ、やっぱり金融機関なのでセキュリティが厳しいんです。2階に入るドアがあるのでですけども、入口が常に開いているわけではないので、常に出入りするような事業だとちょっと使いづらいかなど。人を呼ばないと開けてもらえないのですね。そういうややこしさはある。ただ、そういうふうには、企業や事業者の方も、地域づくりについて考えてくださっている方は増えているかなという感触は得ています。

太田先生、病院というのは、その辺というのは、何か貸すという希望はあったりするものなのではないかな。すみません、突然振って。

○太田委員 感染症の問題ではないので。

○千ヶ崎課長 やっぱりそういったところ  
はありますよね。

○太田委員 そこはちょっと難しい。

○諏訪部会長 あとは、町によっては、どこ  
でもサロンといって、商店街のそういう協力を  
得ているとかというのはあるので、企業の  
こういうちょっとしたやつを、何かワッペン  
でも張って、協力何とかというふうにしてい  
くとかなんかして、いろいろなことをやって  
いるのだと。どこでもサロンプロジェクトと  
かなんか適当なことを言ってたくさん増や  
すぞとか、何かちょっと運動的にしていけば  
いいのだと思います。

○千ヶ崎課長 なるほど。そうなんですよね。  
だから、やっぱりそういう企業が工夫してや  
ってくれているということをアピールでき  
るような手助けをちょっと行政はしなければ  
いけないかなと。

○諏訪部会長 行政はありがたいと言え  
ばいいのね。宣伝になるようなことをすれば  
いい。

○千ヶ崎課長 そうですね。宣伝になるよ  
うな見せ方をちょっと工夫しなければいけ  
ないかなとは思っています。

○中村委員 だから、事業所にもアプローチ  
しているんですよ、協力してくれないかと。  
だから、お金を出せなんて言うとおれだから、  
ではなくてね。

○諏訪部会長 ある場所を貸せと。

○中村委員 そう、場所とかね。子どもさん  
たちに、商品を上げるとか、余っているもの  
を。昔、私はもらったことがあるのですけれ  
ども、ドンキさんからもう廃棄するべきもの  
をもらって、子どもさんたちに配った経験が  
あるんですよ。あのときドンキは協力してく  
れたんです。段ボールでバーツと持ってきて  
くれて。だから、そういうような形で、地域  
の企業さんにも入ってもらうと、本当に地域

全体を巻き込んだいい運動になるかなん  
ていうふうには考えているんです。

○千ヶ崎課長 人の話がちょっと出たと思  
うのですけれども、なかなか人が増えていか  
ない現状があるとおっしゃっていたじゃな  
いですか、やっしてくださる方、シルバーが。  
高齢者は増えているけれども、その人たちは  
減っているというのは、どういうことが根本  
にあるのでしょうかね。PRということをお  
っしゃっていましたけれども、本当にPRだ  
けなのか、それともやっぱり考え方そのもの  
が少しずつ変わってきているのかとか、その  
辺というのはどこにあるのでしょうか。

○中島委員 まあ、いろいろですけれどもね。  
意外と単価を上げたりするのかなという気  
もありますけれどもね。うちも、1時間当  
たり最低賃金ですから1,000円ぐらいです  
けれども、それをちょっとオーバーですけれ  
ども、1,100円か1,200円ぐらい。  
そうしたら、少しはやってみるかなという方  
もいらっしゃるのかな。だけど、そういう意  
味では、あまり困っていないというかね。俺  
はもっと、私はこれでいいんだ、このぐら  
いでいいという感じの方たちが。だけど、働く  
人は、どんどん欲しいのですよね、週に2回、  
3回は嫌だ、せっかく。

○大竹委員 恐らく定年の年齢が上がって  
きているという影響があるんじゃないかと。  
前は60歳だったのが、今60、65・・・、  
これからはまた上がってしまうから。やっぱ  
りシルバーさんに来るには。

○千ヶ崎課長 自分の本業のほうはまだ確  
保されていないということ。

○中村委員 シルバーさんもそうだけれど  
も、老人クラブもそうだけれども、足立区だ  
って60歳以上が21万人いるでしょう。老  
人クラブに入っているのは1万2,000人  
ですよ。後期高齢者だって今16万人でしょ

う、大体ざっとそんなものでしょう。

○千ヶ崎課長 後期高齢者はもうちょっと少ないですね。

○中村委員 それにしても老人クラブに入っているのは1万2,000人なのだね。1割にもならない。それで悩んでいるの。もうそっちのほうが悩みが多いです。

○大竹委員 入り方を知らない人がいますよね。

○中村委員 だから、それは宣伝しなくてはいけないというので、私は広報紙の裏表紙を使っていろいろ楽しんでいる写真を載せて募集広告をつくったりしたのだけれどもね。年をとってきて、やっぱり人とつながらないで生きていけないのだから。もうちょっとつながってほしいという悩みを私は思っているんですよ。でも、どんどん高齢者が増えていくのに会員はどんどん減っていくし。もうそっちのほうが頭が痛い、いろいろなことをやっていますけれども。

○千ヶ崎課長 ボランティアの現場では、何かそういうことで感じるところというのはありますか。変わってきたなみたいなことは。

○大竹委員 変わってきたというか、やっぱりボランティアの高齢化が進んでいて、新旧の交替がうまくいっているグループと、全くいなくて、なくなってしまう。さっき言っていた給食を始めたようなところでも、配送がある。要するに配る車の運転士さんがいないとか、その人も高齢になってそれこそ事故などを起こしてやめてしまう人がいて。でも、ボランティアをしようという気持ちの人はいっぱいいるわけ。ただ、一番今心配しているのは、ボランティアセンターのここあだちカレッジ、あれが今年度でなくなってしまうという。要するに、ボランティアを養成していくということが、なかなか、そういうあれができていないのではないかな。

○結城委員 一応今年度であだちカレッジというのは終わって、ボランティアのほうの養成というよりは、むしろもともとは社会福祉協議会のあったかサービスの会員さんとか、社協のいろいろな支援者になってもらいたいというところから始まったのですが、それが今少しコンセプトが変わってきてしまったのがあって、廃止となりました。今後は足立区の皆援隊講座と連携をとらせていただいて、人材の育成はしていきたいと思っています。ただ、イコール、ボランティアというふうにはまだつながらないところが多いですね。

○大竹委員 そうそう。つなげる方法を考えなければいけないですね。よくカレッジの中でグループが今まで幾つかできてきているし、ちゃんと自分たちでやっているのですね。そういう機会というのは、やっぱりなくしてほしくないなという気持ちが強いですよ。

○中村委員 企業の定年を迎える人たちに対しての講座みたいなのができないのですかね、各企業でね。それで社会へ参加することの大切さを講義するとかね。講義するなんておこがましいけれども、そういうお話もすることも必要なのではないですかね。今はもっとも60歳では定年にならないか。私は60歳で定年しちゃったのだけれども。前、保健所に頼まれてその話をしてくれと、トウアの保健所まで飛んでいったことがあるんですよ。それで、みんな定年になった人と、なるべき人たちが、男ばかり、こんな40~50人来ていましたよ。私は地域でこういうことをやっている、だからこれは非常に人間的にあれがあるでしょうということを宣伝したんですよ。何十年前だけれどもね。やっぱりそういう構造にしなければいけないし、特に介護のサポーターなんていうのは、千ヶ崎さんも言っていたけれども、中高校生あたりか

らサポーター講座なんかをやったほうがむしろいいような気もする。年寄りにしてもしようがない、もう先がないんだもん。そう思いますよ。

○大竹委員 高齢者の引きこもりをなくそうということで、昔、団塊の世代が退職するというときに、男たちのボランティアという、年1回NPOでボランティア等が集まって、紹介をして会員を増やそうと。それが5年ぐらい前になくなって、今は……クラブという形でやっているのですけれどもね。少しずつは人が増えるのですけれども、やっぱり急には増えない。いろんな場所でPRしているんですけどね。そのグループは、1つの講座をやるのではなくていろいろなことをやる。ほかのそういうグループとつながりを持って、コラボして一緒になって行事をやるということをやっている。それがもうちょっと大きくなっていくと少しずつ増えていくかなと。

○諏訪部会長 あとは、ちょっと話があちこちにいきますけれども、今の時期考えなければいけないのは、来年以降に二層レベルでどうしていくかということをも真面目に考えなければいけないので、人材育成なんかは、足立区全体でやるよりは、二層でできるかわからないのですけれども、少し地域的な生活圏でまとまりをもって一緒にやっていくとかということをやったほうがいいと思います。だから、いきなりボランティアに行くかという、またちょっとね。だから、緩やかな地域レベルでいいと思うのですけれども、いろいろな団体が協力して、どこの団体も後継者が欲しいわけだから、少し活動の見本市みたいなこともやって、新しい地区に呼びかけるとか。企業はやったほうがいいのだけれども、本社でやられても足立につながらないから、結局は足立の各地区で私の地区にこれがあ

るのかという形は、それはそれでやらなければいけなくて。だから、そういうのをちゃんと二層のコーディネーターと一層が協力して、各地地区でつくっていくようなことをやるし、そういう活動の予算化をしなければいけないんですよ、そういう活動。だから、そういう事業を行政としてどう展開するかということもちゃんと考えなければいけないと。

○中村委員 あまり養成講座なんて大げさじゃなくて、俺が最初に頼まれたように、時間があるのだったら、ごみを出してくれないかと、ここから始めたほうがいいような気がする。俺は、それで頼まれてやり出した。

○諏訪部会長 ふわっとしたボランティア活動だと、あまり来なくなっているんですよ、最近。だから、具体的にこういうことをやってほしいとか、こういう活動をとかと、それだったらというふうに入ってくるので。そういう具体的な活動はこれだったらということが、地域で見えるようにしなくてはいいですよ。それをやったほうがいいと思います。今、大体、二層の活動はその地区での人材の掘り起こしというふうに移ってきていますからね。

○結城委員 二層はまだ機能配置されていないのですが、来年度からなのですが。

○諏訪部会長 そうですよ。

○結城委員 1つは、今、諏訪先生に言っていたような、二層レベルの人材育成というのは、恐らく先ほどのフォローアップみたいな自主化プログラムと、あともう1つは介護予防サポーターの養成みたいなもの。生活支援サポーターではなく、また体操のサポーターの講座ですとかリーダー的な感じの講座みたいなのを開く予定ですので、それが二層レベルで、まだブロック単位ぐらいで創られていくだろうということは、体操オンリ

一とは多分恐らくならないと思うので、体操だけではなく、今や。

○諏訪部会長 そうにしないほうがいいよ、本当に。

○結城委員 まずは、箱は体操なのですけれども、恐らく出口のところは多種多様にあっいていかなと思っています。中村委員の言ったとおり、それはコップ出してみたいなものだったり、お手伝いとかというものを、多分紹介も恐らく出てくるだろうと思いますので、そこは二層と一層でまた話し合って、出口をどのようにするか、出口戦略を持ちたいなというふうに思っっています。また、活動見本市みたいなものを来年度の最終のほうで、やっぱりちょっと必要だろうなと思っっていますので、どのぐらいの規模になるかわかりませんけれども、僕もちょっと二層と話をさせていっただい、取り決めができるようにしていきたいと思っっていますので、期待してください。

○諏訪部会長 議事録をちゃんと残しておいって。

○千ヶ崎課長 残します。

○諏訪部会長 そこにいろいろな地区の団体の、老人クラブはやっぱりブロックぐらいの組織だとか。そうなっっていくと、少しいろいろな活動ともそれなりにいくし、そこも1つのルートになって地域活動につながるようになるというかなと。

○千ヶ崎課長 今聞っいていても、いろいろな団体の皆さん、いろいろな現場の皆さんから、いろいろな意見が出てくるんですよ。これを行政として、どういうところにフォーカスしってつくっていったらいいのかなというの、いつも迷っているところなんです。だから、足立区は、そうはいっっても68万、69万人いるでかい都市なので、1つ何か物事を起こすとなると、やっぱり大規模なものになっしてしまうんです。だけど、そうはいっっても、

諏訪先生がおっしゃるとおり、地域でのそういうもうちょっと小さい何か取り組みみたいなことからというとかで言っくと、役所は足立区の人口規模からすると、本当に動きが悪いなと自分でも思っっているんです。

○諏訪部会長 でも、足立は支所がないのでしゅう。

○千ヶ崎課長 そうです。だから、地域包括支援センターがやっぱりどうしてもそういうふうになっってしまうんです。

○諏訪部会長 支所がないのであれば、それは支所がというふうに言っっている区もありますけれども、それはできないから。

○千ヶ崎課長 そうですね、世田谷区は。

○諏訪部会長 そうだけれども、地区を意識した展開というのもしっていくわけですよ。だから、一層もいって、二層もあるのだから、一層と二層が協力して地区の動きをやるような方針をはっきり持っていくという形じゃないですか。

○千ヶ崎課長 そこが重要ですからね。

○中島委員 でも、地域包括ケアシステムの構築に向っけて今動っいていますよね。その中で人材育成というの、やっぱりあっってもよさそうですよね、教育も。全部を包括でいくような人材育成、緩やかな組織づくりとか、そういう横のつながりをうまくつなぐ人とか、そういう人材育成。企業から来た人は、もうばっちりやっっちゃいますよね。地域づくりは万全にこれ、バラシてつくり直ししましゅうというやり方ではなくて、あるやつの、今の組織をうまくつなげるとかね。そういう意味では、先生が言われたように、有償ボランティアというの、がちゃんとあっってもいいですよ。何が何でもボランティアですよではなくて、ここからここまではちゃんとした技能を持っているので有償ボランティアということでも、今の時代はあっってもよさそうです。

募集もね。ボランティア、無償ボランティアではなくて、有償ボランティア。

○結城委員 多分恐らくBはBで形をつかってあげて、それを補完するという言い方はわかりませんが、住民サービスなんか自然発生的に行われているという中で、二重、三重のサービスであったり、仕組みみたいなものが出てくればいいかなと。だからBは必要だと思います。

○中島委員 僕も、あちこちで話を聞くのですけれども、お頼みする人もお金で払ったら気兼ねなくできるという人もいらっしゃいますよ。もう「すいません、すいません」じゃなくて。ねえ。5分と5分の対等になるから、遠慮なしにもう少しこうやってよと言えるし。無償では「もういいです。こっちでやります」ということで、やっぱり人間、損ですよね。やっぱり対等な立場でお話したほうが、いい意見も出るし。

○諏訪部会長 Bは、それなりの、さっきも言った助成の仕組みがあれば、手を挙げて、やりたいという人は、そりゃあ70万人いれば出てきますから。企業でいろいろやってきた人で、仕事になるかどうかはわからないけれども、仕事の乗りで割と本格的にやりたいみたいな人が出てきますからね。それは何か。それが助成金とか、多少何かそういう第一歩が踏み出せるようなものがあれば、結構やると思いますよ。あまり拠点の維持費にきゅうきゅうとしなければ、ある程度活動は続けられるので、そこのところがちょっと賄えるぐらいのいい助成をつかってあげればいいと思います。

○事務局 すみません。Bは、専門型から通所型、どちらから始めたほうがいいのかそういったものは。

○諏訪部会長 それはどっちもやったほうがいいのかと思うけど。居場所づくりをやりたい

人もいるでしょうから。それはいると思うので。文京なんかは、賃料が出るようなやり方でやったりしていますよね。そういうところまでお金を積めるかにもよりますけれども、いろいろ検討して、あまり総合事業対象者だけに。だから、あれですよ。一般介護予防のお金で出しているほうが柔軟性が高いと思うので、そっちでつくってあげたりするといいですね。

○千ヶ崎課長 Bではなくてということですか。

○諏訪部会長 はい。文京なんかは週1回の体操のための、体操というのは大体週1回ペースでやるでしょう。サロンで週1でやる場所というのは少ないんですよ。体操だったら週1で、みんななんかやるんですよ。そこからやると効果がないと思うのと。それで、そのついでに、来ない人のところに訪問に行ったりとか、包括につないだりとか、ちょっと助け合いをやってくれというのは、要件にしているようです。そうすると、それはサロンですから、週1回の。だから、通いの場といたら、こっちのBと考えないほうがいいですよ。体操みたいなものもそうやって。だから、別にこんな業者に。3,000万円を払うのはいいと思うのですけれども、それで住民に年間の活動費を数十万円払って、多様なそういう週1の場をたくさんつくってもらおうと。包括を経てとか、卒業してリーダーだとか言わないで、金があるのだったら、「はい」と手を挙げる人をつかまえばいいと思います。

○千ヶ崎課長 早いですか。

○諏訪部会長 そのほうがいいのかと思う。

○大竹委員 結構地域でいろいろな技術を持った人いっぱいいますからね。そういう情報というのはとったほうがいいのかと思う。この間、キカンで梅島地域にこういう人がいます

よという情報を集めているということをやったんだけど。そうすれば、その人に声をかければ出てくるかもしれないし。やっぱり出てこられる人をまず引っ張ってこなければいけない。それから周りの地域の人たちを引っ張ってあげればいいんじゃないですか。

○結城委員 サービスBも、本当にサービスとしてBと位置づけるところもあれば、サービスBもどきみみたいな形であったり。うちの区は、サービスBみみたいなのをやっているよというところもあるのです。デイサービスではなくて、それはもう逆にサービスの形で見せてしまうという手もあって。Aはサービスですので、必要でありBもそういう緩やかなものもあるよというふうな見せ方をしても構わないかなと。恐らくやり方や仕組みは様々あるので、まず議論をスタートしてみてもいいんじゃないかな。

○諏訪部会長 ただ、ぜひいろいろなところに見せたり、ちょっと包括とかの結城さんのところと検討して、これだったらいけるのではないかなという案でもつくっていったらいいのではないかなと。

○千ヶ崎課長 そうですね。次回、考えていく、いいかどうかですけれども、その会議をちょっとしてですね。

○諏訪部会長 この回で年3回やっていて何も進まないの、その間をちゃんとそういうプロジェクトが埋めていかないと進みませんので。確かこの会は足立区の作戦会議みたいなものなので。実際に活動が起きるのが理想だからね。それでどうやって動くかということ、作戦を考えるのがこの会議の役割ですから。

○結城委員 来年度からは二層の協議体というのが少しずつ地域で動き出しますので、その報告も含めて一層の協議体の場で少し作戦会議をやらなくてはいけません。

○諏訪部会長 二層の動きがここに上がってくるようにならないと、その意味がないですよ。

○結城委員 そうですね。

○諏訪部会長 だから、二層は地域ケア会議でやるのですか、来年度。

○結城委員 今のところの案は、来年度ですけれども、地域ケア会議と協議体とあんしん連絡会も兼ねられるという、来年は少しまだ整理がちょっとつけられないので、少しごちゃ混ぜになるのですけれども、地域ケア会議と一緒にやることも多いかもしれません。一緒に考えようということで。今の地域ケア会議もあれですけれども、議題によってメンバーが変わってきてしまったりするので、恐らく諏訪先生が考えている協議体からは少し外れてしまうかもしれませんね。

○諏訪部会長 全般でいうと地域ケア会議だけでやっている、あまりうまくいっている地区はないですよ。だから、結局、地域ケア会議というのは包括に呼ばれて、みんな「しょうがねえな」と言ってきょうは何の会議だ、と思いながら行く場だから、大して活性しないんだよね。だから、地域でいろいろな活動を起こそうと思ったら、活動したいという人たちのところに出ていかなければだめなので、そういうやり方をするとか。それから、さっきも移送を社会福祉法人とかデイサービスに手伝ってくれという話があったように、地域ケア会議に入っていないけれども、事業者さんとか、こんなことだったらやるよと言ってくれる人を巻き込むようなやり方をしないとだめなので、地域ケア会議の延長で今までのメンバーでやっている、多分だめですよ。そこはよく考えたほうがいいと思う。あまりうまくいっていないです、そういうところは。あと足立も、誰がコーディネーターかわからないやり方でやろうと思って

いる。コーディネーター機能はあれだけでも。

○千ヶ崎課長 そうです。

○諏訪部会長 というふうになったときに、そのいい面と、誰が責任を持っているかわからなくなるという面があるから、そこはちゃんと責任を持って動く人、これは誰だとか、1個1個につけるのはどうかわかりませんし、あまり行政が言い過ぎると、前みたいと同じになってしまうので、それを避けようとしたのだと思うのですけれども、無責任にならないにはしないといけません。

○千ヶ崎課長 そうですね。

○諏訪部会長 普通は、二層が始まったときはコーディネーターを集めた研修とかどこもいっぱいやるのですけれども、足立はそれができなそうじゃないですか。責任者を集めた会議を時々やるという感じですよ。

○結城委員 二層コーディネーターだけ来てというわけにいかないですね。

○諏訪部会長 いかないですよ。

○結城委員 研修や報告会でこれをやるからセンターで代表を出してねと言って、それぞれが来る人が日がわりで変わってしまう可能性もあるので、積み上がらないかもしれません。

○諏訪部会長 それがよい方面に出る場合もあるけれども、何か言われてきたけれども、それで戻ったら、こういう支援の仕事をしているというふうになる可能性が高いから。そこはちょっと注意しないと。出だしはすごく大切だと思うのですよ。

好きなことをみんな、私も含めて言っておりますが、言い足りないことございますか。

○千ヶ崎課長 患者さんとかを見ていて、何かそういう自発的な活動だとか、お仕事の考え方だとか、何か最近ちょっと思うようなこととか、患者さんを見ていて何か気づくよう

なことはありますか。

○太田委員 普通夏祭りとか、そういうイベントをやっていますね。そういうときには、皆さん、熱心だと思うし。やっぱり患者さん、外来自体が地元の人が多いから。要するに、医者とか病院と地域の年寄りの方、あと多岐、ほかのこと……とかはある程度いろいろなつながりがある。それが何かくつつくような感じですよ。

○千ヶ崎課長 昔の患者さんと比べて、例えばやっぱり退職の年齢が高くなったりとかということで、意識がちょっと変わってきているのかなとか、何か思うところがありますか。

○太田委員 ……人は少ない。今だったら糖尿病とかそういった……登録して、そういった意味では、だから年齢だけではなくてもうちちょっと中ぐらいの……若い方も……。

○千ヶ崎課長 例えば見ていると積極的に地域に出ていったりとかいろいろなことをやっている人は、何かこういう傾向にある、やっぱり元気だよとか、そういうのは見て取るようなところがありますか。

○太田委員 それはどちらが先だかわからない。

○千ヶ崎課長 わかりました。

○諏訪部会長 皆さん、残り時間で、聞き足りないこととかありませんか。

○千ヶ崎課長 きょうの話を聞いて、それぞれ皆さんからいろいろな意見をいただいて、令和2年度から足立区は仕組みを少し変えようとしているところの中では、動き出しがとても大切だなというのは、きょうすごく印象に残った言葉としてあります。我々が、行政がやろうとしていることというのは、やっぱりどうしても大がかりになってしまっていて、地域の人たちをいかにそういう気持ちになってもらうかだとか、もうちょっと現場に即した何か取り組みというのが本当は必

要なのだけれども、そこをやっぱり一層とか二層の方たちに、うまくつくってもらうために、行政として何をやらなければならないのか。それから、それぞれボランティアの団体とか、シルバーの団体とか、そういった中での人たちをどうやってつなげていったらいいのかとか。こういういろいろなことをやっているけれども、いろいろなことをどうやってうまくつなげて、采配していったのかなということ、改めて感じたところですね。サービスなのか、自主的な活動なのか。その人たちの意向をどうやって聞いて、どういうふうな仕組みをつくって、どうやってつなげていけばうまく回っていくのかというのを、仕組みを、先生からも3,000万円かけるといったら、お金を渡してやって、これでやってもらったほうがいいよと、そのとおりでなと思いますし。

○諏訪部会長 3,000万円もかけると同時に、住民のほうにもお金が回るように検討した方がいいと思います。

○千ヶ崎課長 わかりました。あと、何か聞いておきたいことは大丈夫ですか。いいですか。

○諏訪部会長 では、よろしいでしょうか。そんな大げさに考えずに、A、Bとか、ちょっと助成金のメニューを研究して検討するということと、二層の立ち上げのときに、具体的に何に取り組んだらいいのかということ、を少し。幸いにして一応遅いほうのスタートだから、いろいろな事例がいっぱいあるから、ちゃんと研究して、こういうふうに行っているのだぞという取り組みのヒントみたいなものが既に世の中にある程度出回っていますから、そういうものを整理して、初年度はこれくらいのことは各地区で取り組もうと。これはあまり義務化してしまうと、上からのあれになってしまうのですけれども、大体、

まずは、これは結局住民にその気になってもらって、いろいろ動いてもらうということを起こしていくという仕事なわけだから、その気になって一緒にやってくれそうな住民とつながるといことがとても大事なことです。だから、そういう感じで。何か営業マンで言えば訪問活動をするのはすごく大事なことです。活動の様子をよくいろいろ聞いてみるとかして、何か一緒にできることを、1個でも2個でも考えるということだと思いますよ。その辺のヒントになるような情報提供をちゃんと基幹と一緒にこうしていくということだろうと思います。

○千ヶ崎課長 ありがとうございます。

○諏訪部会長 では、議事としては終わらせていただいて。最後に事務局のほうからお願いします。

○事務局 本日はお忙しいところをご出席いただきまして、ありがとうございました。

以上で、本日の推進部会は終了となります。ありがとうございました。